

## 海鳥類の偶発的捕獲とその管理 (総説)



操業中に生きて混獲され放鳥されるハジロアホウドリ

海鳥類と漁業との間には、鳥群れを利用した魚群探査や鳥による漁獲物、投棄魚、養殖魚の捕食など様々な関係がある(清田 2006)。網漁具や釣り漁具に海鳥類が誤って掛かる偶発的捕獲は、多くの海鳥類個体群に脅威を与えている。海鳥の偶発的捕獲を伴う漁業としては、流し網、底刺し網、定置網、トロール、はえ縄などがある。公海流し網が禁止されるようになった一因は海鳥類や海獣類の偶発的捕獲にあり、トロールでは海鳥の死亡原因となるネットゾンデケーブルの使用が禁止されるようになった。海鳥類など大型海洋動物の偶発的捕獲を適切に回避し共存をはかることが、漁業活動を持続的に営む上で必要条件となっている。近年はえ縄における海鳥類の偶発的捕獲が世界的に大きな問題となっており、FAOでは1999年に、はえ縄によって偶発的に捕獲される海鳥の削減に関するための国際行動計画(IPOA-Seabirds)を策定し、関係各国が軽減措置の導入、研究開発、教育訓練、データ収集を推進するための国内行動計画を策定するよう求めている。ここでは、我が国のまぐろはえ縄を念頭におき、偶発的捕獲の発生が懸念されるアホウドリ類及びミズナギドリ類について、その生物学的特徴と偶発的捕獲の発生状況、及びその削減のための漁業管理について概説する。

### 生物学的特徴

#### 【分類】

アホウドリ類はミズナギドリ目アホウドリ科に属し、くちばし基部の左右に鼻管をもつことが特徴である(清田・南 2000)。外部形態に基づいてアホウドリ属 12 種とハイロアホウドリ属 2 種に分ける分類体系が長らく用いられてきた(表 1 の旧分類)。しかし、アホウドリ類は出生場所への回帰性が強く各営巣集団の遺伝的独立性が高いことから、外部形態や繁殖周期の異なる個体群が亜種もしくは別種として細分化されるようになり、最近では遺伝子分類に基づいてアホウドリ科を 4 属 21 ~ 24 種に再編する分類体系が採用される傾向にある(Robertson and Nunn 1998、Tickell 2000、Brooke 2001、2004)。新しい分類体系はまだ流動的な部分もあるが、本総説では小城ほか(2004)が提唱した和名に準じて記述する。

ミズナギドリ科海鳥類はアホウドリ類と同様にミズナギドリ目に属し、同目の特徴である鼻管をもつ。ミズナギドリ科海鳥類はフルマカモメ類 6 属 8 種、クジラドリ類 1 属 6 種、ミズナギドリ類 3 属 25 種、シロハラミズナギドリ類 2 属 36 種の計 12 属 75 種から成る。本総説では、我が国のまぐろはえ縄漁業と関係が深いオオフルマカモメ、カッシュクオオフルマカモメ、マダラフルマカモメ、オオハイロミズナギドリ、ノドジクロミズナギドリ及びアカアシミズナギドリについて取り上げ、これらを総称してミズナギドリ類と呼ぶことにする。

#### 【分布】

アホウドリ類は南大洋と太平洋に広く分布し、北大西洋には分布しない(図 1)。モリモーク属、ハイロアホウドリ属、ワタリアホウドリ属は南大洋に分布する。営巣地は南緯 35 ~ 55 度の間に位置し、多くは人里離れた海洋島に散在する(Tickell 2000)。洋上における分布域は、全体としては亜熱帯収束線以南の周極分布を示す。アホウドリ類は飛翔能力に優れており、ワタリアホウドリやハイガシラアホウドリでは種として周極分布を示すだけでなく、非繁殖期に亜南極域に沿って南大洋を周回移動する個体があることが衛星テレメトリーによって知られている(BirdLife International 2004)。具体的な分布域は種や成長段階によっても異なり、ハイロアホウドリのように南極前線を越えて南極海のバックアイス付近まで分布する種もある。逆にアムステルダムアホウドリの洋上分布域は南インド洋中部の亜熱帯水域に限定されている。

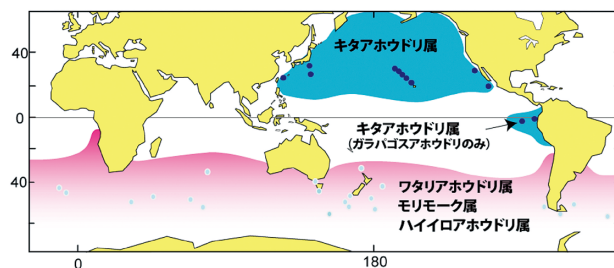


図 1. アホウドリ類の営巣地と洋上分布 (南大洋の 3 属の分布域は重複するため、まとめて示している)

表 1. アホウドリ類各種の個体群の状態 (IUCN 2012 による)

旧分類和名	新分類 和名・英名・学名	つがい数	推定総個体数	増減傾向	IUCN 判定
マユグロアホウドリ	Black-browed albatross <i>Thalassarche melanophrys</i>	593,447	1,150,000 <sup>a</sup>	↘	EN
	Campbell albatross <i>T. impavida</i>	24,600	?	↗	VU
ハイガシラアホウドリ	Grey-headed albatross <i>T. chrysoloma</i>	96,000	250,000 <sup>a</sup>	↘	VU
キバナアホウドリ	Atlantic yellow-nosed albatross <i>T. chlororhynchos</i>	13,900	27,800 <sup>a</sup>	↘	EN
	Indian yellow-nosed albatross <i>T. carteri</i>	41,580	160,000	↘	EN
ニュージーランドアホウドリ	Buller's albatross <i>T. bulleri</i>	31,939	?	→	NT
	Pacific albatross <i>T. platy</i>				
ハジロアホウドリ	Shy albatross <i>T. cauta</i>	19,000	70,000	?	NT
	Salvin's albatross <i>T. salvini</i>	30,750	61,500 <sup>a</sup>	?	VU
	Chatham albatross <i>T. eremita</i>	5,245	11,000 <sup>a</sup>	↗	VU
	White-capped albatross <i>T. steady</i>	77,145	154,000 <sup>a</sup>	↘	NT
ススイロアホウドリ	Sooty albatross <i>Phoebastria fusca</i>	14,000	?	↘	EN
ハイイロアホウドリ	Light-mantled albatross <i>P. palpebrata</i>	24,000	58,000 <sup>a</sup>	↘	NT
ワタリアホウドリ	Wandering albatross <i>Diomedea exulans</i>	6,107	20,100 <sup>a</sup>	↘	VU
	Tristan albatross <i>D. dabbenena</i>	1,698	7,100	↘	CR
	Gibson's albatross <i>D. gibsoni</i>	8,050	44,500 <sup>a</sup>	↘	VU
	Antipodean albatross <i>D. antipodensis</i>				
アムステルダムアホウドリ	Amsterdam albatross <i>D. amsterdamensis</i>	26	170	↘	CR
シロアホウドリ	Southern Royal albatross <i>D. epomophora</i>	7,855	27,200 <sup>a</sup>	→	VU
	Northern Royal albatross <i>D. sanfordi</i>	5,800	17,000 <sup>a</sup>	↘	EN
ガラバゴスアホウドリ	Waved albatross <i>Phoebastria irrorata</i>	18,200	34,694 <sup>a</sup>	↘	CR
コアホウドリ	Laysan albatross <i>P. immutabilis</i>	591,000	1,180,000 <sup>a</sup>	→	NT
クロアシアホウドリ	Black-footed albatross <i>P. nigripes</i>	64,500	129,000 <sup>a</sup>	↗	VU
	Short-tailed albatross <i>P. albatrus</i>	?	2,364	↗	VU

<sup>a</sup> 未成熟個体を含まない成鳥のみの個体数、増減傾向：↗増加、→安定、↘減少、? 不明

IUCN 判定: CR (Critically endangered 絶滅危惧 IA 類), EN (Endangered 絶滅危惧 IB 類), VU (Vulnerable 絶滅危惧 II 類), NT (Near threatened 準絶滅危惧)

キタアホウドリ属は北太平洋に 3 種、東部熱帯太平洋に 1 種が生息する。ガラバゴスアホウドリは、熱帯域に生息する唯一の種で、洋上での分布域もガラバゴス諸島とエクアドル周辺の近海に限られている。アホウドリ、クロアシアホウドリ、コアホウドリの 3 種は、北太平洋に広く分布するが、コアホウドリが北西側、クロアシアホウドリが南東側に重点的に出現する傾向をもつ。鳥島で繁殖するアホウドリの海上分布については、目視調査や衛星追跡によって詳細が解明されつつある (Suryan *et al.* 2006、清田・南 2008)。アホウドリはクロアシアホウドリやコアホウドリに比べると沿岸性が強く、春になり営巣を終えたアホウドリは日本列島、千島列島、アリューシャン列島の陸棚縁辺域に沿って北上し、夏にはベーリング海からアラスカ湾へ移動する。

本総説で取り上げたミズナギドリ類のほとんどは亜熱帯取東線以南の周極分布を示し、南大洋に分布するアホウドリ類と分布域は重複する。オオフルマカモメ属 2 種は南極前線を境界にカッシュクオオフルマカモメが北側、オオフルマカモメが南側に分布の中心があり、オオフルマカモメは南極大陸沿岸にまで分布する。ミズナギドリ類 6 種のうちアカアシミズナギドリだけが非繁殖期に北太平洋やインド洋低緯度域に長距離渡りを行い、南北両半球に広く分布する。

**【生態】**

アホウドリ類やミズナギドリ類は細長い翼をもち、風速勾配を利用したエネルギー効率の良い飛行法 (ダイナミックソアリング) で長距離を移動しながら、海面付近で魚類、いか類、

甲殻類などの餌を食べる表層採食者 (surface feeder) である。アホウドリ類は滑翔に適した長い翼を持つため潜水能力は余り発達しておらず、ワタリアホウドリ属はほとんど潜らないが、モリモーク属やハイイロアホウドリ属の中には 5 m 以上潜る種もある (Prince *et al.* 1994)。アホウドリ類は食物のかなりの部分を海面に漂う死んだいか類、甲殻類、魚卵などを拾って食べる拾い食い採食 (scavenging) に依存している。種によって拾い食い食性への依存度は異なり、自力で潜水して活き餌を採ることもある (Croxall and Prince 1994)。拾い食い食性の強いアホウドリ類にとって、漁船が投げ入れる餌は格好の食物になる。マユグロアホウドリやワタリアホウドリは漁船に良く付くことが知られており、投棄される漁獲物の屑や不要魚を積極的に食べる。Thompson and Riddy (1995) の推定によれば、フォークランド諸島で繁殖するマユグロアホウドリは、年間に摂取するエネルギーの 5.4% をトロールからの投棄物に依存しているという。空中からの餌の探索は主に視覚に頼っていると思われるが、嗅覚も索餌に役立っているようである (Nevitt 2000)。

ほとんど洋上で生活するアホウドリ類やミズナギドリ類の中でオオフルマカモメ属 2 種だけが陸上でも餌を採り、アザラシなど哺乳類、鳥類、魚類の死肉を食べる。両種は洋上においても海面に漂う死んだ生物や漁船からの投棄物を食べる拾い食い食性が強い。オオフルマカモメ属以外のミズナギドリ類はアホウドリ類よりも小型であり、翼を利用して潜水して採餌する種が多く、ノドジロクロミズナギドリやオオハ

イロミズナギドリのように 5 m 以上潜水して自力で餌を採る種もいる。

**【再生産】**

アホウドリ類は一般に長寿命で、長いものでは 50 年以上生きる。成熟するまでに 5 年以上要し、巣立ってから成熟するまでは営巣地に戻らず外洋で生活するものが多い。産卵から雛の巣立ちまでに要する期間は 7～14 か月に及ぶ。繁殖期あたりの産卵数は 1 つがい 1 卵で、繁殖周期はワタリアホウドリ属、ススイロアホウドリ属及びハイガシラアホウドリは 2 年に 1 回、その他は 1 年に 1 回である (Gales 1993)。個体間のつがい関係 (pair bond) が非常に強く、同じ相手と毎年つがいを形成する。片方の死亡などでつがい相手と出会えない場合には、その後 1～2 年間は繁殖を行わないと言われている。ミズナギドリ類は成熟するまで 4 年以上要し、繁殖期間も 7、8 か月に及び、アホウドリ類と類似した繁殖生態をもつ。

**【個体群の動向】**

アホウドリ類の個体群動向は繁殖地によって違いがあるが、減少傾向を示す個体群が多い。表 1 は種別の個体群サイズと増減傾向を示したもののだが、IUCN (2012) によれば、22 種に分類したアホウドリ類のうち、増加あるいは安定傾向を示すものはキャンベルアホウドリ、ニュージーランドアホウドリ、チャタムアホウドリ及びミナミシロアホウドリの南大洋アホウドリ 4 種と、アホウドリ、コアホウドリ及びクロアシアホウドリの北太平洋アホウドリ 3 種であり、その他 13 種は減少傾向を示している。レッドリスト・カテゴリーでは絶滅危惧 IA 類が 3 種、IB 類が 5 種、II 類が 9 種、準絶滅危惧が 5 種として掲載されている。2008 年、2010 年及び 2012 年にアホウドリ類のレッドリスト・カテゴリーが見直された。絶滅危惧 IA 類であったチャタムアホウドリは、営巣地の縮小がみられないことや個体数が安定あるいは増加傾向であることから、絶滅危惧 II 類にダウンリストされた。絶滅危惧 IB 類であったクロアシアホウドリは、はえ縄混獲死亡数や減少率が過大評価されていたため、個体群の将来予測が減少傾向から一変して増加傾向を示したことから、絶滅危惧 II 類にダウンリストされた。絶滅危惧 II 類であったニュージーランドアホウドリは営巣地が広範囲に分布し個体数が安定していること、また、同類であったコアホウドリは 1990 年代後期と 2000 年代初期における個体数の減少傾向から一変して増加傾向を示していることから、両種ともに準絶滅危惧にダウンリストされた。一方で、絶滅危惧 IB 類であったゴウワタリアホウドリは、営巣地が狭い範囲にあり個体群の将来予測が減少傾向を示したことから絶滅危惧 IA 類にアップリストされた。

ミズナギドリ類の個体群動向を表 2 に示した。ミズナギドリ類はアホウドリ類に比べ個体数が多く、また、陸上での繁殖が穴居性である種が多いため、正確な個体数を推定することが困難である。IUCN (2012) によれば、オオフルマカモメ、カッシュクオオフルマカモメ、マダラフルマカモメ及びアカアシミズナギドリは増加あるいは安定傾向を示し、ノドジロクロミズナギドリ及びオオハイロミズナギドリは減少

傾向を示す。レッドリスト・カテゴリーではオオフルマカモメ、カッシュクオオフルマカモメ、マダラフルマカモメ及びアカアシミズナギドリは、絶滅の脅威が低い軽度懸念にリストされている。ノドジロクロミズナギドリが絶滅危惧 II 類に、オオハイロミズナギドリが準絶滅危惧にリストされている。

アホウドリ類やミズナギドリ類の減少要因としては、漁業による偶発的死亡の他に、営巣地の荒廃、ネコやネズミなどの移入動物による卵や雛の食害、感染症、プラスチック呑み込み、石油流失や重金属、有機塩素化合物による汚染などがある (Gales 1993, 1997, Tickell 2000)。その中でも漁業による偶発的死亡と移入動物の影響を受けている個体群が最も多いと考えられている。移入動物による海鳥類の被害に対しては、有害獣の駆除が有効であることが報告されている (Donlan and Wilcox 2008, Pascal *et al.* 2008)。さらに、病気や気候変動などの影響も無視できないとする研究成果も報告されている (Weimerskirch *et al.* 2003, Weimerskirch 2004, Jenouvrier *et al.* 2005)

表 2. ミズナギドリ科各種の個体群の状態 (IUCN 2012 による)

分類	和名・英名・学名	つがい数	推定繁殖体数	増減傾向	IUCN 判定
フルマカモメ類	オオフルマカモメ <i>Southern giant-petrel</i>	46,800	100,000 <sup>a</sup>	↗	LC
	マダラフルマカモメ <i>Macronectes giganteus</i>	12,160	21,000	↗	LC
	カッシュクオオフルマカモメ <i>Northern giant-petrel</i>	?	2,000,000	↔	LC
ミズナギドリ類	マダラフルマカモメ <i>M. halli</i>	?	2,000,000	↔	LC
	ノドジロクロミズナギドリ <i>Diapton capense</i>	1,200,000	3,000,000 <sup>a</sup>	↘	VU
	オオハイロミズナギドリ <i>White-chinned petrel</i>	80,000	400,000	↘	NT
	アカアシミズナギドリ <i>Procellaria aequinoctialis</i>	?	650,000	↔	LC

\*a 未成熟個体を含まない成鳥のみの個体数、増減傾向：↗増加、↔安定、↘減少、? 不明  
IUCN 判定：CR (Critically endangered 絶滅危惧 IA 類), EN (Endangered 絶滅危惧 IB 類), VU (Vulnerable 絶滅危惧 II 類), NT (Near threatened 準絶滅危惧), LC (Least concern 軽度懸念)

**はえ縄における偶発的捕獲**

**【偶発的捕獲の発生状況】**

ここでは、はえ縄と海鳥類との関係について解説する。アホウドリ類や本総説で取り上げたミズナギドリ類の主な分布域は南大洋と北太平洋の亜熱帯～亜寒帯水域であることから、海鳥類との競合が起こる主な漁業は、マジェランアイナメを主対象とした南極海の底はえ縄、南大洋のミナミマグロを主対象とした浮きはえ縄、北太平洋のまぐろ・かじき類を対象とした浮きはえ縄、北洋の底魚類 (オヒョウ、ギンダラなど) を対象とした底はえ縄である。このうち我が国から出漁しているのは南大洋の浮きはえ縄と底はえ縄、北太平洋の浮きはえ縄である。南大洋のミナミマグロ漁業では 1992 年より乗船科学オペレーターによるデータの収集を行い、海鳥の偶発的捕獲の実態解明に努めてきた。その結果、当初 Brothers (1991) により年間 44,000 羽と推定されていた海鳥類の捕獲数は、回避措置の導入により近年では年間 2,000～9,000 羽まで低下した。一方北太平洋では、独立行政法人水産総合研究センターによる調査船、都道府県の試験船や水産高校の実習船によるはえ縄操業調査を通じて、コアホウドリ及びクロアシアホウドリの捕獲が起こることが確認されている。

【偶発的捕獲の回避手法】

はえ縄における海鳥の偶発的捕獲は、投縄中の漁船の船尾付近の海面で発生することから、ここで海鳥類が釣餌を取ることができないような工夫を施すことにより、偶発的捕獲を削減することが可能である。アホウドリ類やミズナギドリ類の生物学的特徴を考慮した上で色々な回避方法が考案されている（清田 2002, 2005, 清田・横田 2010）。

- 1) トリポール：アホウドリ類は滑空性に優れた細長い翼を持つ代わりに、空中での静止や方向転換が苦手なことから、着水する釣り餌の上に障害物を設けることにより餌の探索や餌取りのための低空飛行ができなくなる。トリポールやトリラインと呼ばれる装置は、漁船の船尾に取り付けた長い棒の先から鳥おとしテープや吹き流しを付けたロープを曳航し、鳥が餌に近づけないようにするものである（図 2, 3）。この装置はもともと日本のはえ縄漁船の乗組員が独自に考案したもののだが、今では世界各国で利用され、“tori-line” という名称で知られている。トリポールは 3 種類に大別され、遠洋まぐろの大型船が使用しているオドシが長



図 2. 南大洋で使用されているトリポール

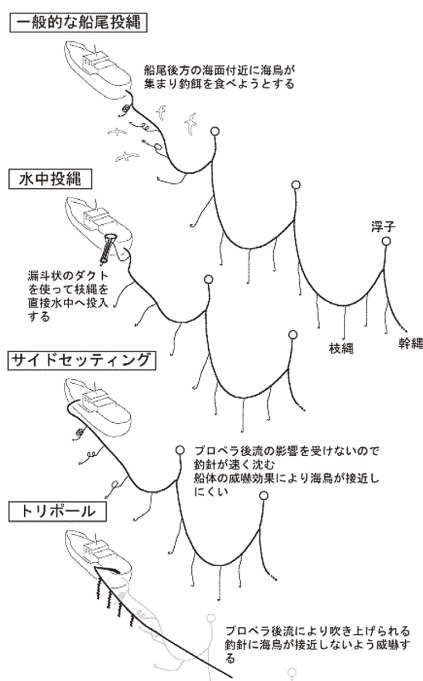


図 3. 投縄中のはえ縄の模式図と海鳥類の偶発的捕獲回避手段を示す模式図

い標準型トリポール、近海小型船が使用している短いオドシが無数に取り付けられた軽量型トリポール、また、その両方のオドシを組み合わせた複合型トリポールが存在する。回避効果については、投縄中に集まる海鳥の種類や数や使用するトリポールのタイプによって変わってくるが、トリポールは鳥の捕獲率を平均 3 分の 1 に減らすことができる。ただし、トリポールを安全に使用し、十分な鳥よけ効果を得るためには、餌の真上にロープや鳥おどしが来るようにポールやロープを調節すること、漁具やプロペラに絡まないよう各船に合わせてポールやラインの形式を工夫することが必要である。

- 2) 加重枝縄：アホウドリ類は潜水能力が乏しいことから、錘の付加や鉛芯入りコードを使用して枝縄を加重し、餌のついた釣針を速く沈めることによって餌取りと釣がかりを防止することができる。加重枝縄は、ミズナギドリ類のような潜水能力の高い海鳥の混獲回避に効果的である。ただし、加重枝縄は、揚縄中に漁獲物から釣針が外れた場合、船員に向かって錘が飛んできて怪我をする危険性があることが問題であった。ワシントン大学との共同研究では、1 m ぐらいのワイヤーの両端に錘を付けた枝縄（ダブル加重枝縄）を使用することで、漁獲物から釣針が外れた場合でも直線的に錘が船員に飛ばなくなり安全であること、また、漁獲効率についても加重と非加重とで差は見られなかったことなどの結果が得られている。ただし、枝縄の収納の際に錘が枝縄に絡まることもあり、今後、改善の工夫が必要である。なお、共同研究の実験に協力する過程でダブル加重枝縄を考案した日本かつお・まぐろ漁業協同組合所属漁船の漁労長は、2011 年 11 月、国際環境 NGO が主催する、混獲を減らすための環境にやさしい漁具・漁法のコンテストにおいて大賞を受賞した。
- 3) 夜間投縄：アホウドリ類の多くは、昼間視覚に頼って餌を探すことから、夜間に投縄作業を行えば偶発的捕獲の発生頻度を抑えることが可能である。投縄を夜間の暗い時間帯に行い、デッキライトは最小限に控え、海面を照らさないようにすると効果的である。ただし、過重な労働スケジュール、投縄作業の危険性、満月時における回避効果の低下という問題に加え、夜間に投縄するため揚縄が日中になることから、低緯度域では漁獲物が高温下のデッキ上にさらされ、長時間の浸漬による漁獲物の品質低下が起こる等の問題がある。
- 4) その他の回避措置：現在、上述したトリポール、加重枝縄、夜間投縄の 3 つの手法が高い混獲回避効果をもち、主要な回避措置として考えられている。その他の回避措置については、他の方法と組み合わせることで効果を発揮する補助的なもの、使用できる船の大きさや海況など水域が限定されているものであり、次に示す方法が存在する。

青色餌は、はえ縄の餌を青く着色して空中から餌を見つけにくくする方法で、海鳥の餌取り行動が抑制され、偶発的捕獲率は 10 分の 1 あるいはそれ以上に低くなるのが洋上調査により確認されている。青色餌は主対象魚種の釣獲率には

余り影響を与えないことも示されている。普及させるためには着色コストの削減もしくは染色作業の省力化が必要である。サイドセッティングは、元々米国のフロリダやハワイの近海はえ縄船が漁労作業の省力化のために導入した方式で、通常のはえ縄漁船は船尾から幹縄と枝縄を投入するのに対し、舷側から投入する漁法である (図 3)。漁具を舷側から投入することでプロペラ後流の影響を受けないために餌が速く沈降する上に、船体の威嚇効果により海鳥が投入した餌に近づきにくく、偶発的捕獲の発生が抑制されることが実験でも確認されている (横田・清田 2008, Yokota *et al.* 2011)。ただし、一般的には漁労機械の配置や作業形態の変更が必要であり、海況の悪い高緯度海域での実施が可能であるかも含めて、操業の安全性や作業効率を確認する必要がある。水中投縄は、餌つき釣針を船上から水面へ投げ込むのではなく、直接水中に投下する方法である (図 3)。底はえ縄では実用化されているが、まぐろ用の浮きはえ縄は漁具構成が複雑であり実用化は難しい。本回避技術は現在開発段階にある。残渣排出管理は、投縄中の船に海鳥の群れが集まらないように、海鳥の餌となるもの (魚屑、回収した釣り餌、残飯など) を捨てない、あるいは、投縄中に多数の鳥が集まって仕方がない場合には、冷凍貯蔵した魚屑をまとめて投入し、海鳥の注意を釣り餌からそらす方法である。この他にも、これまで様々な偶発的捕獲回避手法の検討や試験が行われてきた。しかしながら、放水装置 (waterjet device) は効果はあるが風に対して弱いこと、爆発音などの音、磁気、光、電気などの刺激因子は繰り返しの使用で海鳥が慣れて効果がなくなることが確認されている。

偶発的捕獲の発生状況は生息する海鳥の種や個体数、漁船サイズや漁具漁法、海況等によって変わると考えられている。南半球の一部の水域ではノドジロクロミズナギドリなどの潜水性ミズナギドリ類がはえ縄投縄時に沈降しつつある餌を捕獲し水面へ浮上させ、さらに、アホウドリ類がその餌を略奪して偶発的捕獲が発生することが問題となっている。このように、飛翔が機敏で潜水性の海鳥が多数生息する水域においては、トリラインと海面の間に空間ができやすい船尾付近に、長いオドシを取り付けたトリラインを使用することで海鳥の接近を防ぎ、さらに、枝縄に錘を付加して餌を速く沈めることで海鳥の潜水捕獲の機会を少なくすることが有効である。一方、北太平洋のはえ縄操業水域では、潜水性の海鳥がほとんど生息しておらず、はえ縄で競合する海鳥はコアホウドリとクロアシアホウドリの 2 種のアホウドリで占められる。そのため、北太平洋においてはオドシが短い軽量トリラインの使用でも十分に海鳥の偶発的捕獲を削減することが可能である。このように、偶発的捕獲の発生は水域によって大きく変わることから、世界中で画一的な回避手法を導入するのではなく、それぞれの水域に生息する海鳥や漁業の実態に応じて柔軟な対応が必要である。また、回避方法はそれぞれに一長一短があるため、単独で使用するよりも組み合わせることで効果が高まる場合もある。日本の漁業者がトリポールやダブル加重枝縄を開発したように漁業者が現場で工夫しながら効果的な方法を使うことも重要であり、漁業者との情報交換や漁業者への啓発普及活動も必要である。

### 【海鳥偶発的捕獲の管理】

はえ縄における海鳥の偶発的死亡は、まず南極海の底はえ縄において問題になり、CCAMLR は 1994 年の決議によって夜間投縄、トリポールの使用を義務づけ、釣針沈降速度の改善、残滓の投棄制限を奨励した。CCAMLR 水域に隣接する南大洋のミナミマグロはえ縄に関しては、CCSBT に生態系関連種作業部会が設けられ、1997 年に加盟国である日本、オーストラリア及びニュージーランドの漁船にトリポールの使用が義務づけられた。CCAMLR 水域の底はえ縄では海鳥混獲数が年間 10 羽未満まで減少したことから、ミナミマグロ漁業においても一層の削減に向けた追加措置の導入が議論されている。北太平洋では、個体数が少ないアホウドリに対する偶発的捕獲の影響が最も心配され、アホウドリの夏季分布域で操業するアラスカ底はえ縄に対しては、2 年間にアホウドリを 4 羽捕獲した場合には漁業の停止という偶発的捕獲の制限枠を設けて、軽減法の普及に努めている。こうした世界的な流れを受け、FAO は 1999 年に国際行動計画 (IPOA-Seabirds) を策定し、関係漁業国に対策を要請した。これを受けて 2001 年 2 月に日本と米国は国内行動計画を提出した。その後ブラジル、カナダ、チリ、ニュージーランド、ウルグアイ、オーストラリア、南アフリカ、ノルウェーも国内行動計画を策定し、ナミビア、EU、台湾なども準備を進めている。日本の国内行動計画は、早くから規制が導入されている南半球のミナミマグロ漁業に加えて、北太平洋の浮きはえ縄を対象に策定された。全水域において生きて捕獲された鳥の放鳥と魚屑の適切な処理を必須要件として要請し、ミナミマグロ漁場や北太平洋においてトリポール、加重枝縄、自動投餌機と解凍餌の併用、夜間投縄、青色餌、放水装置、サイドセッティングの中から措置を選択するよう要求した。さらに、アホウドリの繁殖地がある伊豆諸島鳥島周辺の重点水域では、10～5 月の間はトリポールと 1 つ以上の軽減措置を併用することを求めている。また、調査研究の面では、偶発的捕獲回避法の開発と評価、国内のアホウドリ類繁殖地の環境改善、漁業データの収集、海鳥の生態学的情報の収集、国際協力の推進が掲げられている。さらに、後述する各大洋の漁業管理機関における海鳥の保存管理措置に従って、2009 年 2 月に日本の国内行動計画の回避措置の改訂も行われ、ほとんどの水域において海鳥の偶発的捕獲の回避措置が導入されるようになった。

各大洋の漁業管理機関において海鳥偶発捕獲の発生状況をモニタリングし、回避措置を導入する動きが進められている。各機関は関係国に国際行動計画の実施と国内行動計画の策定を促すとともに、偶発捕獲が多発する水域では回避措置の使用を求めている (表 3)。中西部太平洋では WCPFC 科学委員会において回避措置の導入が検討され、2007 年の年次会合で北緯 23 度以北及び南緯 30 度以南の太平洋において操業するはえ縄船は、表 4 に示した A と B の 2 つの欄 (2 ボックス型の選択肢) から 2 つ以上の海鳥混獲回避措置を使用することが勧告された (WCPFC 2007)。WCPFC の勧告は、漁業者が回避措置の組み合わせを選択できる自由度をもつ点で評価できる。インド洋の IOTC や東部太平洋の IATTC に

においても WCPFC に準じた 2 ボックス型の回避措置が導入された (IOTC 2012a, IATTC 2011)。同じ大洋内であっても操業水域によって漁船の大きさ、使用漁具、操業形態、海況、出現する鳥の種類と数などが異なる。漁業の地域特性に応じて効果が高く実用性のある方法を選択できるように保存管理措置を改善していく必要がある。一方で、地域漁業管理機関による規制措置の不整合を解消し、漁業者が混乱することなく使いやすい措置を柔軟に組み合わせられるようにすることが、回避措置の遵守状況の改善につながり、結果的に海鳥混獲問題の解決に近づくであろう。そのような観点から、特定の管理水域をもたない CCSBT では独自の保存管理措置ではなく、太平洋においては WCPFC の保存管理措置、インド洋においては IOTC の保存管理措置、大西洋においては ICCAT の保存管理措置を遵守することを求める勧告が策定されている (CCSBT 2011)。近年、ICCAT では、WCPFC や IATTC の 2 ボックス型選択という保存管理措置と異なり、海鳥の偶発的捕獲が多く発生する南緯 25 度以南においては混獲回避効果の高い夜間投縄、トリポール、加重枝縄の 3 つから 2 つを選択するという制約を強めた措置が 2011 年に採択され (ICCAT 2011)、WCPFC でも南緯 30 度以南、IOTC でも南緯 25 度以南においては、以前の 2 ボックス型選択という保存管理措置が見直され、ICCAT と同様の措置が 2012 年に採択された (IOTC 2012b, WCPFC 2012)。

以上、本稿ではまぐろはえ縄と海鳥類の関係について論じた。しかし、海鳥類と漁業との問題は、外洋域のはえ縄だけに限らず、ウミスズメ類、カモメ類、ミズナギドリ類等の海鳥類が沿岸漁業と競合関係にある (小城 1991) との指摘もあるところ、将来的には営巣地環境など漁業以外の影響要因の

表 3. 各水域のまぐろ漁業管理機関におけるはえ縄漁業の海鳥偶発捕獲に関する規制状況

水域	管理機関	管理措置	規制内容
大西洋	ICCAT	Recommendation 11-09 (運くとも 2011 年 7 月までの実施期)	25° S 以南で夜間投縄、トリポール、加重枝縄の 3 つから 2 つ以上の回避措置使用
		Recommendation 07-07	25° S 以北、20° S 以南は Recommendation 07-07 に従って 20° S 度以南でのトリポール使用 予備のトリポールの携行 鳥が多い場合の 2 つのトリポールを使用 (夜間投縄、枝縄加重を行うメカニカルは除外)
インド洋	IOTC	Resolution 12/06 (2014 年 7 月より Resolution 10/06 から本 Resolution に変更)	25° S 以南で夜間投縄、トリポール、加重枝縄の 3 つから 2 つ以上の回避措置使用
ミナミマダガスカル (南大洋)	CCSBT	Recommendation ERS	25° S 以南で 2 つ以上の回避措置使用 その他海域で 1 つ以上の回避措置使用 各国における IPOA の遂行 インド洋においては IOTC の措置に使う 中西部太平洋においては WCPFC の措置に使う 各国における IPOA の遂行
中西部太平洋	WCPFC	Conservation Measure 2007-04 (2014 年 7 月より 30° S 以南の措置変更)	23° N 以北、30° S 以南で 2 つ以上の回避措置使用 その他海域で 1 つ以上の回避措置使用 (2014 年 7 月から、30° S 以南で夜間投縄、トリポール、加重枝縄の 3 つから 2 つ以上の回避措置使用) 各国における IPOA の遂行と報告
東部太平洋	IATTC	Resolution C-11-02	23° N 以北、30° S 以南及び 2° N~15° S で 95° W 以東、15° S~30° S で 85° W 以東で 2 つ以上の回避措置使用 その他海域で 1 つ以上の回避措置使用

表 4. 23° N 以北、30° S 以南の中西部太平洋で操業するはえ縄漁船に適用された WCPFC の海鳥混獲回避措置。A 欄、B 欄から 1 つずつ選び、2 つ (もしくはそれ以上) の回避措置を使用する。ただし、A 欄のバードカーテン及び加重枝縄を併用した舷側投縄を選択した場合には 2 つ使用したと見なされる。

A 欄	B 欄
バードカーテン及び加重枝縄を併用した舷側投縄	トリポール
船上照明を最小とした夜間投縄	加重枝縄
トリポール	青色餌
加重枝縄	ラインシューター
	水中投縄装置
	残滓排出管理

把握も含めた包括的な調査研究を実施していく必要がある。

執筆者

- かつお・まぐろユニット
- 混獲生物サブユニット
- 国際水産資源研究所 かつお・まぐろ資源部
- 混獲生物グループ
- 南 浩史
- 外洋資源ユニット
- 外洋底魚サブユニット
- 国際水産資源研究所 外洋資源部
- 外洋生態系グループ
- 清田 雅史

参考文献

BirdLife International 2004. Tracking ocean wanderers: the global distribution of albatrosses and petrels. Results from the Global Procellariiform Tracking Workshop, 1-5 September, 2003, Gordon's Bay, South Africa. 100 pp.

Brooke, M. de L. 2001. Seabird systematics and distribution: A review of current knowledge. *In* Schreiber, E.A., and Burger, J. (eds.) *Biology of Marine Birds*. CRC Press, Boca Raton, Florida. 57-85 pp.

Brooke, M. 2004. *Albatrosses and Petrels across the World*. Oxford University Press, Oxford. 499 pp.

Brothers, N. 1991. Albatross mortality and associated bait loss in the Japanese Longline Fishery in the Southern Ocean. *Biological Conservation*, 55: 255-268.

CCSBT. 2011. Recommendation on mitigate the impact on ecologically related species of fishing for southern bluefin tuna. Commission for the Conservation of Southern Bluefin Tuna. [http://www.ccsbt.org/userfiles/file/docs\\_english/operational\\_resolutions/Recommendation\\_ERS.pdf](http://www.ccsbt.org/userfiles/file/docs_english/operational_resolutions/Recommendation_ERS.pdf) (28 November 2012)

Croxall, J.P. and Prince, P. A. 1994. Dead or alive, night or day: how do albatrosses catch squid? *Antarctic Science*, 6: 155-162.

Donlan, C. S. and Wilcox, C. 2008. Integrating invasive mammal eradications and biodiversity offsets for fisheries bycatch: conservation opportunities and challenges for seabirds and sea turtles. *Biol. Invasions*, 10: 1053-1060.

Gales, R. 1993. Co-operative mechanisms for the conservation of albatrosses. Australian Nature Conservation Agency. 132 pp.

Gales, R. 1997. Albatross populations: status and threats. *In* Robertson, G., and Gales, R. (eds.), *Albatross biology and conservation*. Surrey Beatty & Sons, Chipping Norton. 20-45 pp.

IATTC. 2011. Resolution C-11-02. Resolution to mitigate the impact on seabirds of fishing for species covered by the IATTC. Inter-American Tropical Tuna Commission.

- <http://www.iattc.org/PDFFiles2/Resolutions/C-11-02-Seabirds.pdf> (28 November 2012)
- ICCAT. 2011. Recommendation 11-09. Supplemental recommendation by ICCAT on reducing incidental bycatch of seabirds in ICCAT longline fisheries. International Commission for the Conservation of the Atlantic Tunas. <http://www.iccat.int/Documents\Recs\compendiopdf-e\2011-09-e.pdf> (28 November 2012)
- IOTC. 2012a. Resolution 10/06 On reducing the incidental bycatch of seabirds in longline fisheries. Indian Ocean Tuna Commission. <http://www.iotc.org/files/CMM/IOTC - Collection of ACTIVE CMMs 20 June 2012.pdf> (28 November 2012)
- IOTC. 2012b. Resolution 12/06 On reducing the incidental bycatch of seabirds in longline fisheries. Indian Ocean Tuna Commission. <http://www.iotc.org/files/CMM/IOTC - Collection of ACTIVE CMMs 20 June 2012.pdf> (28 November 2012)
- IUCN. 2012. 2012 IUCN Red List of Threatened Species. <http://www.iucnredlist.org/> (28 November 2012)
- Jenouvrier, S., Weimerskirch, H., Barbraud, C., Park, Y-H., and Cazelles, B. 2005. Evidence of a shift in the cyclicity of Antarctic seabird dynamics linked to climate. *Proc. R. Soc. B*, 272: 887-895.
- 清田雅史. 2002. 延縄漁業における海鳥類の偶発的捕獲: 問題の特性と回避の方法. 山階鳥類研究所研究報告, 34: 145-161.
- 清田雅史. 2005. はえ縄漁業とアホウドリ類の知恵比べ—環境に優しい漁法をめざして—. 海洋水産エンジニアリング, 2005年2月号: 7-12.
- 清田雅史. 2006. 海鳥類. In 水産総合研究センター (編), 水産大百科事典. 朝倉書店. 91-94 pp.
- 清田雅史・南 浩史. 2000. 嘴の形態による南大洋アホウドリ類の検索. 遠洋水産研究所報告, 37: 9-17. <http://www.enyo.affrc.go.jp/bulletin/37/kiyota37.pdf> (2006年11月17日)
- 清田雅史・南 浩史. 2008. 船舶調査から推定した日本周辺におけるアホウドリの海上生息域. 山階鳥類学雑誌, 40: 1-12.
- 清田雅史・横田耕介. 2010. まぐろ延縄漁業における混獲回避技術. 日本水産学会誌 76: 348-361.
- Nevitt, G.A. 2000. Olfactory foraging by Antarctic Procellariiform seabirds: life at high Reynolds number. *Biol. Bull.*, 198: 245-253.
- 小城春雄. 1991. 受難続きの日本の海鳥たち. 私たちの自然, 350: 6-11.
- 小城春雄・清田雅史・南 浩史・中野秀樹. 2004. アホウドリ類の和名に関する試案. 山階鳥類学雑誌, 35: 220-226.
- Pascal, M., Lorovec, O., Bretagnolle, V., and Culioli, J-M. 2008. Improving the breeding success of a colonial seabird: a cost-benefit comparison of the eradication and control of its rat predator. *Endang. Species Res.*, 4: 267-276.
- Prince, P.A., Huin, N., and Weimerskirch, H. 1994. Diving depths of albatrosses. *Antarctic Science*, 6(3): 353-354.
- Robertson, C.J.R. and Nunn, G.B. 1998. Towards a new taxonomy for albatrosses. In Robertson, G. and Gales, R. (eds.), *Albatross biology and conservation*. Surrey Beatty & Sons, Chipping Norton. 13-19 pp.
- Suryan, R. M., Sato, F., Balogh, G. R., Hyrenbach, K. D., Sievert, P. R. and Ozaki, K. 2006. Foraging destinations and marine habitat use of short-tailed albatrosses: A multi-scale approach using first-passage time analysis. *Deep Sea Research II*, 53: 370-386.
- Thompson, K.R., and Riddy, M.D. 1995. Utilization of offal and discards from 'finfish' trawlers around the Falkland Islands by the Black-browed Albatross *Diomedea melanophris*. *Ibis*, 137: 198-206.
- Tickell, W.L.N. 2000. *Albatrosses*. Yale University Press, New Haven. 448 pp.
- WCPFC. 2007. Conservation and Management Measure 2007-04. Conservation and management measure to mitigate the impact of fishing for highly migratory fish stocks on seabirds. Western and Central Pacific Fisheries Commission. <http://www.wcpfc.int/doc/cmm-2007-04/conservation-and-management-measure-mitigate-impact-fishing-highly-migratory-fish-st> (28 November 2012)
- Weimerskirch, H. 2004. Diseases threaten Southern Ocean albatrosses. *Polar Biol.*, 27: 374-379.
- Weimerskirch, H., Inchausti, P., Guinet, C., and Barbraud, C. 2003. Trends in bird and seal populations as indicators of a system shift in the Southern Ocean. *Antarctic Science*, 15(2): 249-256.
- 横田耕介・清田雅史. 2008. 海鳥類の混獲回避技術—近年の取り組み. 日本水産学会誌, 74(2): 226-229
- Yokota, K., Minami, H., and Kiyota, M. 2011. Performance of side-setting method as a mitigation measure for reducing incidental catch of seabirds on a large-sized longline vessel. *Fisheries Engineering* 48: 7-14.